

# 「日本」がどうして「Japan」？ — そのルーツ調べ

2003/02/11

I. Nishida

Richmond

「日本」を英語で「Japan」と呼ぶのは今は小学生でも知っています。今回の「閑話休題」では、2月の建国記念日にかけてのわけではありませんが、なぜ「日本」を英語で「Japan」と呼ぶようになったのか、そのルーツを探ってみたいと思います。その前に、結論と関係しますが、「日本」を現在の読み（脚注1）では「ニ ホン」または「ニッ ポン」と2音節(Syllable)で読み、「Japan」も「ジャ パン」と同じ2音節に対応していることを頭の片隅に残しておいてください。

## 1. おさらい — 「日本」の国名の起こり

古代万葉時代の人々は、私たちが住むこの国土を「アシハラノミズホノクニ」（「葦原の瑞穂の国」）だとか「アキツシマ」（「秋津洲、（秋津島）、（蜻蛉洲）」）と詠んでいます。「葦原の瑞穂の国」という表現は、水が豊かで、その水辺には葦がしげり、秋には実り豊かな稲穂が一面に広がる、そういう情景を髣髴とさせます。また、「アキツシマ」については、かの有名な万葉集の国見の歌、

「大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山  
登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ  
うまし国ぞ 蜻蛉島（あきづしま） 大和の国は」（舒明天皇 1-2）

があります。ここで「あきつ」というのはトンボの古名で、トンボが多数飛び回るほどに作物が実る豊かに国という意味でしょう。

（個人的なことですが、数十年前に小生は京都・山科の天智天皇陵のすぐ近くにある高校を卒業しました。この山科の地は、古代の飛鳥・奈良と近江を結ぶ交通の要所でした。遠足などで、実際に万葉時代の遺跡を訪ね、現場を目の前にして万葉のロマン、波乱に満ちた「大化の改新」、「壬申の乱」の古代史を熱っぽく授業してくれた教師を思い出します。）

さて、ここであげた「葦原の瑞穂の国」だとか「蜻蛉島」というのは、私たちが生活を営んでいるこの国土を称したもので「国」としての正式な名前、すなわち「国号」ではありません。では、正式な国号「日本」が使われたのは何頃からかということになります。歴史家の間では専門的な論争はあるのですが、大綱は、聖徳太子が607年に小野妹子を遣隋使として隋に派遣した時、隋の煬帝（ようだい）宛ての国書に「日出る処の天子、日没する処の天子に書を致す。恙（つつが）無きや？」としたためたのを契機に、「日が昇るところに近い国」という意識が対外折衝などの場面で持たれるようになったのででしょう。そして、史実としてははっきりしているのが、701年に完成した大宝律令で、朝鮮や中国からの使節に対しては「日本天皇」と称することを決め、また、702年（大宝2年）に派遣した遣唐使で「日本国使」と名乗っていることから、恐らく7世紀後半には「日本」を国号として用いることが確立していたといえます。（それ以前、朝鮮や中国は我が国を「倭」と呼んでいたようです）。

ここで、「国」という観念があるというのは、その構成要素として、「領土」（脚注2）、「国民」とその「統治・支配組織」がある、逆にいえば、施政権の及ばない所、自分の国とは異なる国や地域の存在が認識された、今風にいえば、「国際感覚」を身につけたということになります。では、この頃7、8世紀の政権支配者層の世界観はどの程度の広がりをもっていたのでしょうか。間違いないところは、（3世紀の卑弥呼の時代の朝鮮半島の諸国との「国交」は別として）、統一国家・大和朝廷（後の「日本政府」）として百済、新羅、高句麗とは使節の相互往来もあり、663年には、百済の求めに応じて救援に行った日本軍が白村江で敗退していることから、対馬海峡の向こう側には、いくつかの国家が存在することと、九州の西方の海の果てには、我が国よりもはるかに文化、文明の進んだ超先進国「隋」、「唐」があることは知っていました。また、仏教の伝来とともに、お釈迦様の生まれた国「天竺」が中国のはるか向こうの遠い国として存在するというのも知識として持っていたものと思われます。地理的広がりとしてはせいぜいこの辺までが当時の為政者の世界観でなかったのでしょうか。

奈良の正倉院には、遠くギリシャ、ローマ文化の影響を受けた物、ペルシャ産の宝物などがシルクロードを通過して到来しています。しかし、今の中国より以西、以遠のイスラム教世界の国々（ササン朝ペルシャ、イスラム帝国など）、さらにその西の今のヨーロッパ・キリスト教世界の国々（東ローマ帝国やフランク王国など）の存在についての地理的世界観は恐らく無かったと見られます。同様に、当時7、8世紀のヨーロッパの国々も、異教徒ムスリムの支配するオリエント地方より東の中国やインドについても知らなかったか、知っていたとしても関心をほとんど持っていなかったにちがいません。

## 2. 「Japan」の語源

上述のように、我が国は7世紀の後半、遅くとも701年の大宝律令制定以前にこの国を「日本」と称することを正式に決めていたようです。

では、この「日本」が英語で何時、どのようにして「Japan」と記されるようになったその背景を探ってみることにします。

### (1) マルコ・ポーロの“ジパング”は”Japan”と関係なさそう

話は、まず、8世紀から13世紀末まで一挙に時代が下って、日本が「黄金の国」として西欧諸国に知られるようになりました。これは、マルコ・ポーロが1299年に「東方見聞録」を著したのが契機となりました。

マルコ・ポーロは、1271年に父親と一緒にイタリアのベネチアを出発し、その後、17年間中国に住んでいます。この間、蒙古(元)の皇帝の信頼も得たといわれています。マルコが蒙古滞在中に、蒙古は二度(1274年、1281年)にわたり日本を占拠しようとして大軍を派遣しましたが失敗しています(元寇の役)。皇帝とも親密であった彼は、日本事情、日本情報をかなり得ていたとみられます。その彼が、1295年イタリアに帰国し、99年に「東方見聞録」著し、その中で日本を次のように紹介しています。

『ジパングは東海の一島で、大陸から約1,500マイルのところにある。……住民は皮膚の色が美しく、姿はよく、礼儀も正しい。……国内には黄金が非常に多く尽きることがないほどであるが王が輸出を許さないので訪れる商人は極めて少ない。王宮の屋根はすべて黄金の板で葺いてある。……窓にも黄金の飾りがついている。』

このように、夢のような国として日本が西ヨーロッパに紹介されましたが、時代がもう少し後であれば、カリフォルニアのゴールドラッシュがごとくヨーロッパのユダヤ人貿易商、美人目当ての奴隷商人が怒涛のごとく押し寄せて来たに違いありません。ありがたいことにそのような事態にはなりません。この理由としては、当時まだ交通機関が発達していなかったこと、ヨーロッパ内部では各国の興亡の繰り返しで安定していなかったこと、また、イスラム世界との衝突でヨーロッパとして十字軍の派遣が精一杯で、さらに東向こうの軍事大国・蒙古(元)と戦ってまでは日本に進出する状況になかったと考えられます。

そこで本論の結論ですが、この「東方見聞録」で日本をジパングとして”Chipangu”(または、”Zipangu”)と綴られています。現在の語源の追跡研究ではこれが英語のJapanの語源になったとはされていません。

---

(2) ”Japan” は「日本」の中国語読みのマレー語経由の借用語だった

研究社・新英和大辞典で、Japan の語源をしらべてみると、まず、マレー語の Japung からの借用語ではないかとし、その、Japung は、中国語 Jihpun からの借用語であるとしています。そして、この jih は「日」、pun は「本」の中国語読みとしています。

このことから、我が国が、7世紀の後半に自ら「日本」と名づけた国号が、発音は「ニホン（ニッポン）」のそのままでありませんが、jih pun と同じ2音のシラブルで発音される中国語として、マレー経由でヨーロッパ語に入ってきました。

ところで、日本に最初に来たヨーロッパの国は、1543年種子島に漂着したポルトガルでした。彼らは、シャム（現在のタイ国）から中国の寧波（ニンポウ）に向かっていましたが台風で遭難し種子島に漂着したものです。ポルトガル船はその後も何回も来航し、鉄砲や中国の生糸を日本にもたらし、かわりに日本の銀を持ち帰ることで大きな利益をあげました。この3年後（1546年、天文15年）アンジローと呼ばれる一人の日本人が鹿児島山川港からポルトガル船で国外に脱出しました。彼は鹿児島の武士でありましたが、人を殺めたため捕まるのを恐れてついにポルトガル船に乗船し国外逃亡を図ったのです。船長は彼をマレー半島のマラッカに伴い、そこにすでに東洋にキリスト教を布教するためきていたフランシスコ・ザビエルに引き合わせました。（アンジローはその後インドのゴアにある学校で勉強し洗礼も受け、3年後の1549年、ザビエルと一緒に鹿児島にもどりキリストの布教活動を助けています。）

これらのエピソードからはっきり言えることは、16世紀初頭には、ポルトガルやスペインはマレー半島を始め東南アジアに相当進出していたことあります。（なお、半世紀前の1498年には、バスコ・ダ・ガマが喜望峰回りのインド航路を発見しています。）

そしてこのマラッカで現地人や中国人華商、（ひょっとして、鎖国令以前にすでに南方進出していた日本人も含めて）などの貿易商人が使っていた ”Japung” がポルトガル語の “Japon”，オランダ語の “Japan” となって、ヨーロッパの各国語に入り、英語では “Japan” として借用されていったとされています。

マルコ・ポーロのジパング” Chipangu”（または、” Zipangu”）が、” Japan” の語源ではなさそうということの傍証として、時代は少し下りますが、マルコ・ポーロと同じイタリアで作成された、Tommaso Porcacchi: Asia. (ポルカッキ『アジア図』)[Venezia, 1572] (大阪大学附属図書館所蔵) では、日本は、” JAPAN

INS.”（日本列島？）と記されています。（北海道は地図上に描かれていない）このことから、マレー語経由のヨーロッパ語への影響と見たほうが妥当と見られます。

（参考）

英語の文献として、最初に日本が言及されたのは、OED(Oxford English Dictionary)によりますと、1577年、「Eden & Willis」という書物の中で“Giapan”と書かれ、次に、1613年、Saris という人が書いた、“Voy. To Japan”（日本旅行記）という書物の中で “Japan” と記されています。

あとがき — 残った疑問、宿題

以上で、以前から調べたかった「Japan」の語源を記しましたが、自分でもまだ腑に落ちない疑問が残っています。もし、ご存知（ヒントでも結構です）であれば是非教えていただきたくお願いします。

（1）「日本」の南方地域での中国語での発音

小生の息子は、高校、大学で中国語を少しかじりましたが、彼が言うには、「日本」は中国語では、“リー ベン”と読み、“ジー プン”と読まないと言います。北京を中心とする標準語では“ジー プン”とは読まないかもしれませんが、中国南方の且つ沿岸地域の、広東語、福建語などの方言でなんと読むかぜひ知りたいところです。また、できれば、マレー語、インドネシア語、タイ語、カンボジア語（要するに、1635年、日本人の海外渡航と帰国を禁止した鎖国令が出されましたが、それ以前に山田長政のように日本人が南方に進出し日本人村や居留地を造った地域の現地語）で、「日本」が何と読むのか知りたいところです。

（2）「東方見聞録」のインパクト

マルコ・ポーロが「東方見聞録」を著し、その中で、日本を”Chipangu”と呼び「黄金いっぱい富める国」としてヨーロッパに紹介していますが、これが各国の支配層や商人にどの程度のインパクトを与え、その結果、我が国にどのような直接的影響を及ぼしたのかがもうひとつ隔靴搔痒の感の疑問が残っています。いい本でもあればご紹介願います。

---

(脚注1)

「日本」と書いて、現在では「ニホン」または「ニッポン」と読みますが、古代では「ヤマト」とも読んだこともあったようです。また、発音も時代によって移り変わりがあるようで、平家物語が書かれた頃は「ニッホン」と発音されたり、また、1603年の「日葡辞典」では「Nifon, Nippon, Finomoto」などと記述しています。

(脚注2)

万葉時代に、我が国を「大八島国（おおやしまのくに）」と呼ぶこともありました。これは、日本列島が生み出された時、8つの島が最初に作られたということで、当時の我が国の「領土」感を現しているといえるでしょう。この8島とは次のものです。

本州、九州、四国、淡路島、隠岐、壱岐、対馬、佐渡島。

という事で、当時、東北の北部（多賀城（現在の塩釜）以北）いわんや北海道、琉球諸島は日本の「領土」とは意識していなかったようです。